高山の文化を高めた人々 72

「山脈詩派の詩人」 和仁 市太郎

林格男

和仁市太郎さんは、明治四十三年（一九一〇）吉城郡船津町（現・飛騨市神岡町）に和仁岩次郎・きくの長男として生まれ、大正十二年（一九二三）三月、旧船津高等小学校を卒業すると同時に、三井鉱山㈱の傍系である神岡水電㈱の給仕として就職した。

神岡水電事務所にて

和仁さんは、九歳の時に父の死に遭い、その後に和仁家へ入れられた養父は、他人のために借金を重ねるほどのお人好しで、和仁さんには弟妹も多くて家は貧しく、中等学校はおろか高等科へ進む余裕もなかった。

しかし、和仁さんの言葉を借りると、そのお養父さんは「どんな大学者にも道徳家にもひけをとらない人道の実践者」で、和仁さんは終生そのお養父さんを敬愛してやまず、宴席の時など決まって誇らしげに、お養父さんとの少年時代の思い出話を語られた。

和仁さんの温厚な人柄、優しく自然を観つめる目、それでいて頑固に一本の筋を通してわが道を行く生き方は、その少年時代に育まれたのである。

ところで、少年和仁市太郎の勤め先の事務所の本棚には文学書がぎっしり並んでいて、いつしか市太郎少年は文学の虜となった。やがて小学校の同窓生を誘って自分たちの手で謄写印刷の文芸誌を発行するようになり、二十歳の時、和仁さんは処女詩集『生を視つめて』を発行された。

しかし、作品のレベルも印刷の技術も稚拙であることに気付いた和仁さんは、一念発起して上京。二年間詩の勉学と謄写技術の修得に努め、昭和七年（一九三二）に帰郷して高山市内に「美踏社工房」を創業。間もなく村田祐作ら数人の同士を誘って同人誌「山脈詩派」を創刊するのである。

自宅にて

「山脈詩派」は戦中の困難を乗り越えて、昭和二十四年の第三十二号まで続いた。その間、和仁さんは福田夕咲・江馬修を師と仰ぎ、「飛騨短歌」の鎌手白映・大埜間霽江らと親交を深めながら研鑽を積んだ。

そして、福田夕咲の死を機に「山脈詩派」を閉じ、およそ十年間岐阜の「詩宴」に籍を置いたが、昭和三十五年、田之下徳重が編集兼発行人となって創刊した「文苑ひだ」、及び昭和四十二年に霞好夫を主宰とする「飛騨作家」の創刊に参画。さらに昭和五十一年には、詩人の虎沢勇治・西村宏一に誘われて「詩誌・すみなわ」を創刊して、文学を目指す後進の大きな指標となった。

その間に和仁さん自身は、郷土の自然と民俗に根を下ろした人間性豊かな詩集『禁猟区にて』・『薄暮記』・『私の植物誌』などを刊行。

そうした長年にわたる業績が認められて、昭和五十五年岐阜県教育委員会から「芸術文化奨励賞」を、同じ年高山市文化協会から「文化功労者顕彰」を授与された。

また、昭和六十二年には、中部ペンクラブ理事久野治氏によって、『山脈詩派の詩人—和仁市太郎の詩業』と題する三五〇頁に及ぶ単行本が出版されている。

和仁さんは早くから、自然と人間を愛する庶民派詩人として多くの人に親しまれてきたが、今後は和仁さんのような純粋な叙情詩人はもう現れないかも知れない。